

最高の料理

とある森の奥で、旅人に憧れる一人の魔女見習いが、魔女のもとで修行をしておりました。

魔女見習いの名はイレイナ。灰色の髪と瑠璃色の瞳が何よりも特徴的な少女です。

ちなみに天才です。

ところでその天才は一体誰か。

そう、私です。

「……………」

まあ冗談なのですけど。

「見てくださいイレイナ。最高の料理を作りましたよ」

などという言葉も何かの冗談であってほしいと願ってやまない私でした。

魔女になるための魔法を私に教えてくれているフラン先生が、

「イレイナ、私、たまにはもっと美味しいものが食べたいです」

と世迷言をぬかしてきたのは、つい先日のこと。

いつも私にばかり料理をさせているくせに一体何を言い出すのやら。私は怒りました。堪忍袋の緒がぶつちんと切れました。

『いやです。たまには先生が料理を作ってください。もう私、怒りましたからね。先生が料理を作ってくれるまで私はぜったいに料理はしません。梃子てこでも動きませんよ。本当ですからね?』

といった感じに、私、とつても怒りました。

さすがに反省したのか、先生は、その翌日に、確かに料理を作ってくれました。

作ってくれた……のはいいのですが。

まあ、なんということでしょう。テーブルの上には見るも無残な光景が広がっているのです。

「……これが最高の料理、ですか……。はあ、どうやら先生の目は濁にごっているようですね」

私は嘆息たんそくを漏らしました。

しかしながら私の嘆息は先生にとっては感嘆かんだんのため息に聞こえてしまったようで、彼女は「ふふ……」と更に笑みをこぼしながら、

「さあ見てくださいイレイナ。これ、食材に何を使っているか分かりますか?」

「イカ墨の Pasta ですか?」

「いいえペロンチーノです」

「なるほど近頃のペロンチーノは麵めんが真つ黒なんですか。勉強めんになります」

「ちなみに麵は最高級のものを利用しています」平然とするフラン先生でした。どうやら私の苦言は彼女の耳を通り抜けてしまっていたようでした。「では次に、このスープには何を使っているか分かりますか?」

「え? すみません。液面が見えないです」

「これにはですね、最高級のロブスターを使っているのですよ」

「……ロブスターが泥の上に刺さっているようにしか見えませんが」

「これはスープです」

「スープですか」

まあ先生が言うならそうなのでしよう。

「ではこれには何を利用していいのか分かりますか？」

「雑草ですか？」

「最高級のサラダです」

「最高級のサラダってなんですか……」

よもや意味不明でした。

しかし先生が言いたいことは、この辺りでようやくお察しできたというものです。

「あの、先生」私は恐る恐るという風を装いながら尋ねました。「もしかして最高級の食材を使っているから最高の料理と言いたいんですか？」

「そうですね？」

「……………」。最高級のものを使うだけで最高のものが作れたら苦労しませんよ。むしろ限られた食材でいかに美味しい料理を作れるかが、私達人人が料理を作るうえでの肝になってくるものだと思います」

高級料理を扱う多くの方がお皿の白い部分にソースで謎の模様を描いたり、崩すのが勿体なく

らしい綺麗な盛り付けをしていますが、あれは恐らく『あー、やべーわー。味は完璧なのに何か物足りねーわー。もうちょっとアートの要素を足したいわー』みたいな風に暇と余裕を持て余した料理人たちの遊び心が生み出したものだと思うのです。

最高級の食材を扱うような人には、それだけのこだわりがあつてしかるべきだとも思います。

しかしフラン先生は、目を細める私に、自信たっぷり様子で言うのでした。

「イレイナ。私の料理を食べる前から否定するのはいかなものかと思えますよ。見た目だつて、こんなにも素敵ではありませんか。味も私が保証します。最高です」

おっと。

目の前の料理にもアートの要素があるとおっしゃいますか。

「……………」

前衛的ですね。

で、実際に食べてみました。

物は試し。

確かに食べてみなければ、先生の料理が旨いかどうかは分かりません。

直後に後悔が胃の奥底から波のように襲ってきました。

「……おええええ」

何があつたかはここでは控えさせていただきます。

「どうでした？ 私の料理、最高だったでしょう？」

「ええ。今まで食べた中でも最高に不味^{まず}かったです。よくもあんなものを自信満々に出せましたね。先生の舌ってどうなってるんですか」

私が毒舌を吐いてみせると、先生は、飄々^{ひょうひょう}とした様子で、

「おや、何を言っているのですか、イレイナ。私はあの料理が最高とは言いましたが、美味しいとは一言も言っていないですよ」

と言ってくるのです。

「……………は？」

どういうことで？

「ちなみに私もさつき試食して意識を失いました。私の料理はやっぱり駄目ですね。最高に不味いです。どんな食材を遣っても私の手にかかれば生ゴミになってしまうようです」

「生ゴミと分かっているながらどうして私に食べさせたんですか……………」

「あれで私がどれほど料理が下手^{へた}くそか分かったでしょう？」

「……………」

「しかしイレイナの料理は素晴らしいですよ。本当の意味で、最高の料理です。私は自分で料理

をするより、イレイナの料理が食べたいです」

「……………」

「というわけで今日もイレイナが料理を作ってください」

結局そうなりますか。

私はため息を一つ漏らしながら、キッチンへと向かいました。幸いにも先生が買いあさった食材が呆れるほどありましたため、味付けには困りませんでした。

それどころか高級食材で溢れかえっているせいで、いつもよりも腕を振るって料理をしてしまったほです。

どうやら、まんまとしてやられたらしい、ということに気づいたのは、ソースでお皿に模様を描いたあとのことでした。